



第 47 号

2016年 7 月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/株昭和堂

新任教授挨拶



地域医療科学
教育研究センター
教授

川口 淳

平成28年1月1日付けで地域医療科学教育研究センターの教授に就任しました。医学部の統計学の講義を担当し、大学内外での臨床研究において統計解析支援を行います。私は生まれも育ちも長崎市です。九州大学に入学した際に初めて県外に出ました。出身学部は理学部数学科であり、皆さんの先輩にはあたらなないかもしれません。大学入学の際には数学が好きだったので数学科に入りましたが、私には純粋数学が合わず、元々図表を見るのが好きだったので統計学を専攻しました。その一分野に医学、農学、水産学などの生物関連分野を応用の対象とする生物統計学があり、現在ではそれを専門としていま

す。そのいきさつですが、特に学位取得の2年半後にアメリカに留学した事が大きな変化点となりました。アメリカでは生物統計学は当たり前で、私が留学したノースカロライナ大学では生物統計学部もあり、教員も80人ほどいます。留学の際には、生物統計学の大家とも言える2人の教授と出会い、今の研究の中心となる脳画像または臨床試験における解析方法の研究をしました。留学から戻ったからは、久留米大学、京都大学の医学部で生物統計学として臨床研究における統計解析を担当しながら、引き続き解析方法の開発を行っています。脳画像解析は特に力を入れていた領域の一つで、精神神経疾患領域

を中心に脳画像を通じてこれまで目に見えなかった病態や原因の解明を目指しています。画像データ解析は、身近なところではデジタルカメラやスマホで撮影した写真の加工で活用されています。私の研究では、脳画像から萎縮などの疾患特異的な変化部位の検出を行っています。これを統計学的に行うには、多くの被験者の画像から統一的な変化を見つけて出す必要があります。その情報を基に、患者さんに適用可能な診断補助ツールの開発に取り組みんでいます。統計学は、多くの情報をとりまとめるための道具とも言えます。そこには限りがあるため、推測が生じますが、その間違いを確率によって表現します。その間違う確率が小さくなるような意思決定を行うわけですね。見方を変えれば、実は統計学は間違いも許容できる学問とも言えます。私も研究者であり、少し他の人とは違うこと

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

可能です。他の例として、治療薬の有効性や耐性を考慮しつつ、膨大かつ複雑な遺伝情報に基づいて各個人に特化した最適な治療法を選択する際にも統計学や情報学が役に立ちます。つい最近では、Google の AlphaGo に代表される人工知能も話題沸騰です。このような最先端の研究に遠からず近からずの形で、私も先ほどの脳画像解析を通じて医療に役立つ解析方法を研究しています。医学・統計学・情報学の総合的領域は、今後、世界的にも科学の中心分野の一つになりそうです。医学部の中に統計学というやや異質な分野が混入しているように思われるかもしれませんが、すぐには必要性が感じられないかもしれませんが、しかし、統計学を基盤とした解析技術は将来きっと役に立つ事でしょう。医学部の皆さんには講義でお会いするのを楽しみにしています。そこで統計学の必要性やおもしろさを伝えることができ、医学における統計学を皆さん自身で深めて広めて頂き、将来、日本でも生物統計学の学部教育などが当たり前になる事を夢見ています。意外にもこれは近い将来に実現しそうな気もしています。私自身も生物統計学の発展に微力ながら貢献できるように、日々精進していきたいと思っています。これからもどうぞよろしくお願ひします。

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

をしないといけないので、統計学のみならず生物情報学(バイオインフォマティクス)の考え方も加えて、斬新かつ効率的な方法開発の研究をしています。統計学は数学を基に理論展開をしていきますが、今後の発展は医学部の皆さんにかかっていると言っても過言ではありません。皆さんが難治疾患の患者さんと接することになり、有効な治療法を発見することもあるでしょう。しかしその新しい治療法を、目の前の患者さんにいきなり使う事は許されません。入念に計画し、患者さんの承諾を得た上で被験者として臨床試験に参加してもらい、そこから得られたデータを適切に解析し客観的に結論づけた上での根拠によって、ようやく治療法として認められます。その過程の中に統計学の知識と技術が必要になります。このような臨床研究が当たり前のようになれば、日本の生物統計学も海外を追い越すような発展を遂げるでしょう。また、先ほどの脳画像解析のように、統計学は膨大なデータの中に潜む規則性を見つけ出す事ができますが、その規則性から将来を予測することも

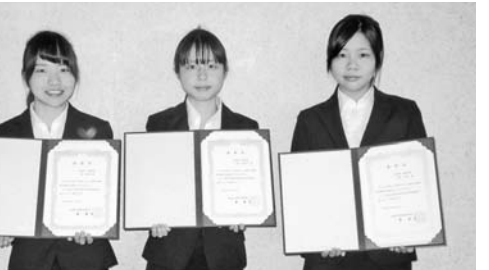
平成27年度 医学部・学部長表彰者



課外活動等

注：学年は平成27年度のもの

医学科 6年 松岡 優毅	第67回西日本医科学生 総合体育大会 男子三段跳び 優勝
医学科 6年 高松 優光	地域貢献 (「学生地域交流の 会」を設立)
医学科 6年 吉田 翔	社会貢献 (数多くの講演活動 を実施)



成績優秀者

注：掲載順はアイウエオ順による。学年は平成27年度のもの

【医学科】		【看護学科】	
6年	沢見 康輔 主税絵理子 奈良崎小百合 平田 理紗 鎗光 志歩	3年	大迫 亮介 木村 倫子 島田 里美 高宮 万莉 村上 陽亮
5年	石瀬 裕子 園田 有理 林 加野 松尾 和紀 三角優莉奈	2年	今里美有紀 古賀 俊介 後藤 憲人 後藤 悠太 凧 絵理
4年	太田 礼音 坪井 萌 鶴田 成二 寺田 圭吾 西原 歩美	1年	木須 絵理 島田 悠史 深村 光 森 美香 山部優理奈
4年	川崎 莉子 濱田ちいか 矢ヶ部千尋	3年	綾部 葉月 上野明日香 小野 詩織
		2年	石井 陽菜 熊丸 梨菜 塚原 仁美
		1年	石飛 早希 大柿菜津子 堤 菜穂

何かの調査で、現代の大学生の必需品のトップはスマホで、学部にもよると思われるが自分用のPCを所有している人も8割強という数字が出ていた。PCを持つ最大の理由は、レポート作成時に必須のことだった。最近では大学によってはプリントアウトしたレポートではなく、電子媒体での提出になっている所も多い。レポートを提出する際には、殆どの学生がワードのファイルで提出するのが一般的なようである。ところが殆どの用事をスマホで済ませてしまうことも可能なので、中にはキーボードを使ったことがないという学生もいた。レポートを撮影した写真を送ってきた学生がいたという。PCが世に出始めた頃を知っている身からすると、キーボード無しで作業は今の時代でも不便に感じてしまうのだが、小さい頃からスマホやタブレットに親しんでいる世代にとっては、むしろキーボードを面倒に感じる人もいるらしい。大学関係者の間ではよく知られた話らしいが、これを聞いたときには妙に感心してしまっただけで、ワードなどの文書ファイルでの提出は便利な反面、コピー自由でコピーした内容を本人はあまり理解せずに送ってたりすることがままある。体裁良くできているので、内容について少し深く本人に尋ねると、実は十分に理解しているわけではないことが判明したりする。

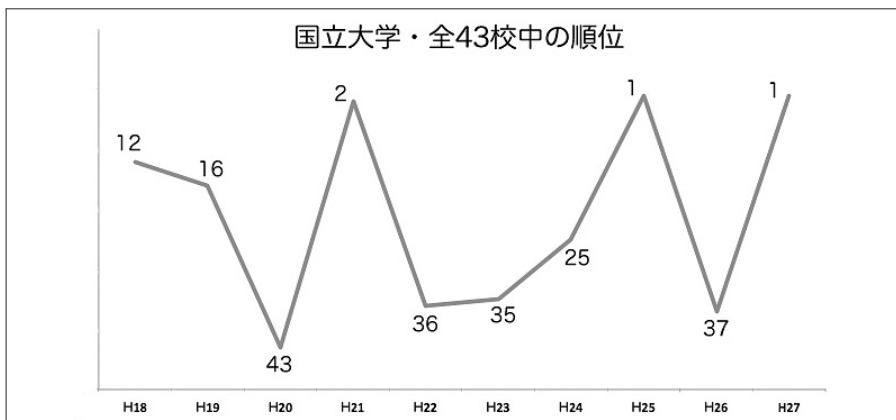
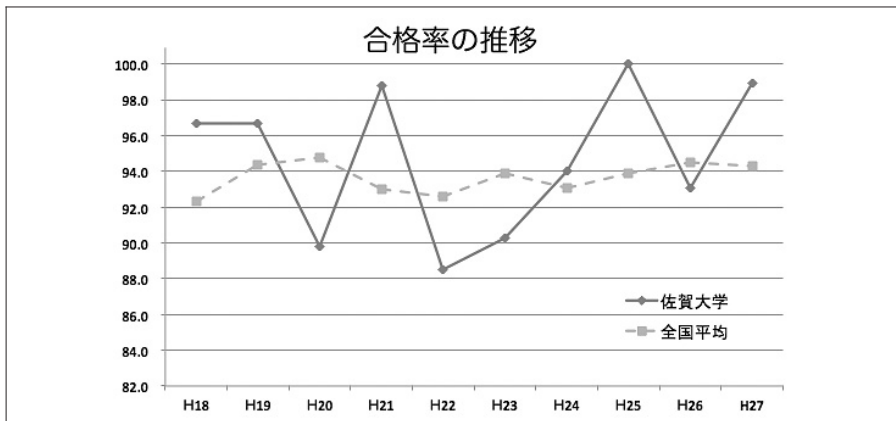
だが、いくら仕事の処理時間が速くなり便利になったとは言え、我々自身の持つ生物学的時間がそうだったわけではない。レポートなどは論理的な文章の組み立てが要求されるが、これはコピーで解決できるものではない。一字一句を吟味し、自分が書くにはそれなりの時間が必要であるが、ネット社会ではその反応の速さが最優先されて、内容の深い吟味については疎かになっている弊害もある。もちろん、学生がネット社会に適応することは必須(というより先頭に立って変革していく存在)であるが、同時に学生時代でないと物事を論理的に深く考えるという訓練もできないのではないかと感じる。手書きのレポートを写メで送った学生の話も聞いて、次回のレポートは全員手書き指定にしてみようかとも思った(尾崎岩太)

コンピュターが発達し、ネット社会になったことで大きく変わったことのひとつに、我々の周りを流れる「時間」が決定的に速くなったことがある。LINEやメールはリアルタイムでやり取り可能で、息つく間もなく反応することが求められる。海外とのやりとりになると、昼夜を問わずに仕事になることもあり、事が過ぎると時間に翻弄されている感も否めない。

むしろ手書きで書いた分、内容を理解できていないのではないかと思ったりする(解説するのに苦労するかもしれない)。



医師国家試験データ(平成18~27年度・新卒者のみ)



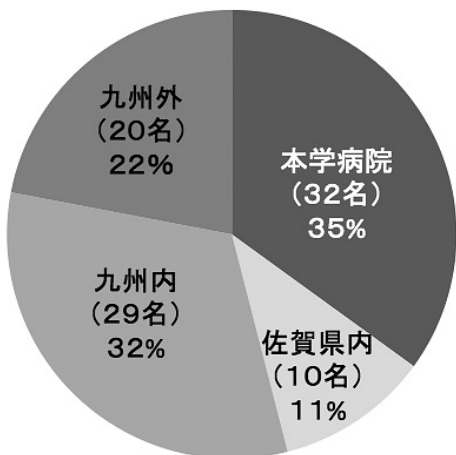
国家試験

去る3月18日に第110回医師国家試験、25日に第105回看護師、第102回保健師、第99回助産師国家試験の合格発表が行われました。本学受験者の合格率は、医師国家試験で新卒者92名中91名が合格し(98.9%、全国平均94.3%)、国立大学法人43校中1位の好成績でした。既卒者を含めると101名中97名が合格(96.0%)となっています。看護師と助産師は合格率100%を達成しましたが、保健師は既卒者1名が不合格となり、合格率は97.7%でした。来年度のさらなる奮起を期待します。

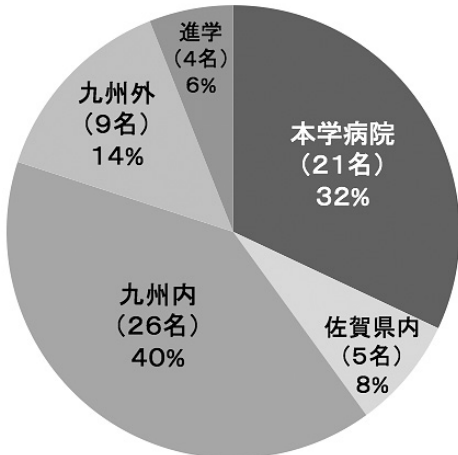
平成27年度 国家試験合格状況

	合格率			全国平均
	新卒	既卒	合計	
医師	98.9% (91/92)	66.7% (6/9)	96.0% (97/101)	91.5%
看護師	100% (60/60)	100% (4/4)	100% (64/64)	89.4%
保健師	100% (41/41)	50% (1/2)	97.7% (42/43)	89.8%
助産師	100% (5/5)	—	100% (5/5)	99.8%

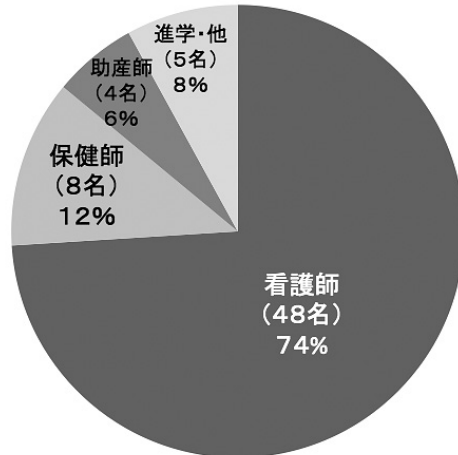
医学科地域別進路



看護学科地域別進路



看護学科職種別進路



卒業生就職先

ご入学おめでとうございます!

	医学科 (106名)	看護学科 (60名)
九州内		
佐賀	28	25
福岡	27	18
長崎	17	5
熊本	5	6
大分	—	—
宮崎	2	2
鹿児島	2	2
沖縄	—	—
九州外		
関東	8	—
中部	2	—
近畿	5	—
中四国	10	1
その他	—	1

4月5日、佐賀市文化会館にて佐賀大学入学式が挙行され、医学部には、医学科106名(男子51名、女子55名)、看護学科60名(女子58名、男子2名)の新入生が入学しました。なお、医学科で男女の比率が逆転したのは、昭和53年に佐賀医科大学1期生が入学して以来、初めての事です。出身高校の地区別内訳を表に示しています。



皆さんは胸上げの祝福を受けたことがあるだろうか。写真は今年の3月に図書館前で撮影したもので、卒業式当日の風物詩となっている。宙を舞う学生さんの顔からは、どこか、はにかんでいるような心地よさが伝わってくる。胸上げする側、される側、皆の心が連帯してまとまる瞬間、傍から見ても清々しい。私も学生時代、サークルで駅伝に参加し、完走後に後輩から胸上げされた。まさに天にも昇る気持ちとはこのことだった。

さてこの胸上げであるが、長野市の善光寺にて五穀豊穡を祈り行われたのが起源だと言われている。そう、牛に引かれて善光寺参り。のこさざるを得ない場面に遭遇したとき、人任せにしないことが、最悪の結果を回避するための重要な良識ある行動であることを忘れないでほしい。今回はいつもと趣向を変え、季節限定の風景を取り上げてみた。卒業生たちの輝かしい未来に、熱いエールを送りたい。(柴田)

医学部の風景⑥

皆さんは胸上げの祝福を受けたことがあるだろうか。写真は今年の3月に図書館前で撮影したもので、卒業式当日の風物詩となっている。宙を舞う学生さんの顔からは、どこか、はにかんでいるような心地よさが伝わってくる。胸上げする側、される側、皆の心が連帯してまとまる瞬間、傍から見ても清々しい。私も学生時代、サークルで駅伝に参加し、完走後に後輩から胸上げされた。まさに天にも昇る気持ちとはこのことだった。

さてこの胸上げであるが、長野市の善光寺にて五穀豊穡を祈り行われたのが起源だと言われている。そう、牛に引かれて善光寺参り。のこさざるを得ない場面に遭遇したとき、人任せにしないことが、最悪の結果を回避するための重要な良識ある行動であることを忘れないでほしい。今回はいつもと趣向を変え、季節限定の風景を取り上げてみた。卒業生たちの輝かしい未来に、熱いエールを送りたい。(柴田)

編集後記

現在、講義棟の1階に仮住まいしている身だが、さすがに学生さんの動静が手に取るように解る。特に深夜、休日を問わず、PBL学習室を利用して勉強に励んでいる学生さんが多い事には驚かされる。なんとも頼もしい限りである。講義室での授業風景も時々目に入るが、少し気になるのは科目によって出席率が低いことである。講義する側からすると、分厚い医学書のすべての内容を時間内に話しきることは不可能である。自然、内容は重要なポイントに集約せざるを得ない。つまり学生さんの立場にすれば、科目の要点を短時間でまとめて教えてもらえる場なのである。これを利用しない手はないと思うのだが、欠席がちの諸君、如何だろうか。もし講義を聴いても理解できないのであれば、諦めてしまいう前に予習などの工夫を試みるべきである。取り返しが付かなくなる前にぜひご一考願いたい。なお、諸般の事情より本号から紙面を2ページに減らすことになった。学部長のお許しをいただいた上で、苦渋の決断である。今後ともご愛読を賜りたい。(倉岡)

編集部からのお知らせ

医学部学生新聞では記事を随時募集しています。研究室での実習体験、課外活動報告、音楽・書籍評論、グルメ情報、あるいは身の回りの出来事に題材をとったエッセイなど、なんでも結構です。旅先で撮影したお気に入りの風景写真の一枚でも歓迎です。ぜひ活字媒体にして一生の思い出を作ってみませんか。記事は電子ファイルで編集長までお送り下さい。同時に学生編集委員も募集しています。Dutyは最低限ですので、兼部もまったく問題ありません。医学部の歴史に名を刻もうという情熱あふれる学生さん、ぜひ門を叩いて下さい。(倉岡 kurata@csaga-u.ac.jp)

新聞編集委員

倉岡晃夫教授(編集長)
河野 史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手(副編集長)、鈴木源晟(研修医)、大野 渚、西原歩美、藤田真衣(医5)、岩永鴻之介、陣内一輝、吉岡瑞姫(医3)

要望などの連絡先

学生課総務
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp